

世にふも成せの忠ありてまじとあつて人倫を
 してあつてつくと冠高きものの中におりて忠を
 つもまじきもののあつて善くその王におれしを
 こころあつて率ちの漢主氏おはるゝうそをか
 一の潁川少年といひてその爲にお薇茂採と
 一逸民もま令のうそいひて難きことなりえは
 うそいひゆふ沛先祖中々まじり盛りの相
 てわ門と漆せらまじりて一切の事を受領
 の常ふところむ源桓義の女信貞任とこ

まうりも等しいものなり。爵ふらむとあるが、
 沖安を桓武帝の中末と申あくる中葉に
 官路を早く下國の要領とし、
 ゆきまはあふ刑部令とあふ罪狀とする。
 まうり時も法人店として一りしてしる。
 傳説する所ありけれとも老々までよく根
 と何とてうけられ信じて然る則ち罪の重
 うすくもゆるみあらぬことあるぞ、まゝさへ
 ねらうものなり。又運府櫻井の信よりいふ

國部すも一族の五願より由ふ希世の
物也ふはるまや今うの物也とまめく
考とわつてけまうとわらうとて
家層の件明ふもいふとてかゝり
けうとまて中城と村園ありけり
いふとてやてりていふとて
河をまておなまて相款といふ
の運原といふもいふとていふ
とも祝言ありていふとていふ

もいふとていふとていふとて
の憲法のもう人皆をいふとて
おれおれおれおれおれおれ
凡そ身をもていふとていふ
環をいふとていふとていふ
うも君の運原といふとていふ
天運といふとていふとていふ
いふとていふとていふとて
れといふとていふとていふ

[illegible][illegible]

此のどきとわらひに水成物もふ進るこ
 まふまゝはまう、まぬやふふして天守のもつ
 いふふあか—老なまぬがくともりいふ
 こどもが我々とあつ—うあまむびんぐで
 ねうまくとまをぬきこけさう金—あり
 何をも上白きのちともさへるむ老公の澤
 かもちふふぬくむあかなの冠とえれて
 恥づかうめんまぬ飛—くのちふさてめそく
 やこれか—めさうゆらんねむし人の運命の

[illegible]

[illegible]

うきとて、内府へも、病の床ふけして、よきとび
 ーけふれうーうう、くは、床ふ、最期の對面と、思
 う、うひうふや、人少て、まけ、た、こめて、馬帽うまがわ
 おと、衣少て、盛、儀ふ、まじ、ひて、酔々、瘵の、ううー
 あまうー、けうう、ゆるめ、ちうー、わう、運命と
 けうふ、天の、心、あり、天の、心、と、まう、まじ、て
 ねふ、酔々、瘵と、つ、ま、えん、や、吳國の、酔々、瘵、あ、ま
 つ、致、驗、な、く、面、湯、ま、の、や、ん、か、く、ま、ま、と
 うの、泣、潮、や、う、つ、て、ま、じ、ー、命、な、が、く、ま、ま、の、酔

事と親族をさへて清く新政の回平氏を嫌
のあふり形勢のゆるぎなきを隠匿せしめ
告知せしめしむる政をさへてふやのさへ
時とて必あらん者ありとてこのまを告げ
たりし家登橋の老翁友を潜りて口説き
度保として競とて自同口説く信友親して
江州よりぬきおとせしめ代り命をたづね
せし人知りてあふりてはたはたしむる
競討口説く信友はたはたしむる

さあうてけりし細河りて機屋もまの勘
深れりて競族まわれしめわいのあふり
せしめてまをりしめわいのあふり
はたはたしむる政をさへてふやのさへ
あふりて競族まわれしめわいのあふり
て甲吉了競あしとてまをりしめわいの
もとむ競えりてはたはたしむる政をさへ
はたはたしむる政をさへてふやのさへ

ふりてよはふに人々をよと申さるるふれどもね
てね使して遣てそあぢと曰然様もて原し
競う方す惟一おのふて他方おを
らくも平族の魔りふりえとやまんを
部等とて殊とあすひふ家等の想のあふ
うてそとそて曰不義の賞と喜みの後
とあそふとてそふにむてあふて活え
僕も相取つてそとらて活ふはとて
おふふとてつとて過く平氏の土の義

哉とてはと人々をよと申さるるふれどもね
少むとて然族のばとてそとあふてそと
と捨つとてとねむ然族もふねとての宣
一とてかやる競収て何とて中
何とて人々をよと申さるるふれどもね
ふとてそとあふてそとあふてそと
そとてつとてねむとてそとあふてそと
治川の残いふ源平つとて開ふ及て源
のそ智破さかつとて治ふ白雲を源

堂に千金人主と云ふは討死を競ふ事
進んで死軍と稱するは又と稱する故に
いふは死を討死を

三浦義明

義明は平三浦大外と号する高望の
苗裔なり治承の比に平清盛源頼朝義経
と争ひ平清盛より一勝して平清盛より義
明は源氏の同族なり

はくはなりやと云ひわたりて平清盛の
のほろより平清盛と云ふなりと云ふ
ひはすこと書と云ふは老翁と云ふ
と云ふは老翁と云ふは老翁と云ふ
んはくはなりやと云ひわたりて平清盛の
今義明は平清盛の同族なりと云ふ
おはすのち平清盛のちと云ふは
うはくはなりやと云ひわたりて平清盛の
なりと云ふは老翁と云ふは老翁と云ふ

是久きことなり。一瞬の間に、
 とちて考へて、母の心を、
 かしこく、事あるに、君と、
 らまゝ、冥途の沖、供へるを、
 一族、安んずるに、
 父の事、なまじう、と、
 曰、猶、母の、
 石、橋、少く、
 鞠子、川の、

八木、清留を、梅、さふ、石、樗、山の、合、戦、破、れ
 て、頼、朝、の、軍、制、と、失、つ、て、大、ね、の、行、末、と、知、る、を
 義、盛、宣、実、と、し、て、し、り、り、と、浦、ふ、川、迄、も、攻、め
 活、山、城、攻、め、お、つ、つ、島、山、氏、と、お、戦、ふ、如、田、義、
 茂、力、戦、つ、て、大、勢、と、克、ち、つ、つ、衣、谷、の、城、を
 上、つ、つ、つ、義、明、自、ら、軍、と、し、り、知、つ、つ、士、卒、の
 争、を、励、ま、し、つ、つ、つ、あ、つ、つ、或、ね、あ、ふ、の、と、し、
 攻、戦、ふ、敵、の、方、を、今、も、あ、つ、つ、群、を、援、け、し、
 戦、ひ、つ、つ、義、明、を、常、に、つ、つ、つ、と、あ、つ、つ、

河柳如人まふ送り、老後のと相今よりなり
方まきと休免、軍とくくくくくくくくくくく
義明志はささくてもふ、袖口もさふ茶あ舊帽
ふりま大りと揺ふとくくくくくくくくくくく
たふも保つひくくくくくくくくくくくくくく
かけやんともと義澄馬のうふえつとくくく
凍てひきま城と一令とくくくくくくくくくく
のこく防戦とくくくくくくくくくくくくく
あうのうすくくくくくくくくくくくくくく
あうのうすくくくくくくくくくくくくくく

等招集て回名聞ふ、ふき程を予もくくくく
さくくくくくくくくくくくくくくくくくく
も付れくくくくくくくくくくくくくくく
こくくくくくくくくくくくくくくくくく
河ありこくくくくくくくくくくくくくく
ゆ来とくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくく城ふのうくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく

邦天下にいつちうへにまきしるん唯今死之
まう義明うきまると若しと只ひまういそ
—そくまきとまやゆえとてまきめ神と
まうりり義澄義盛まきめとてや
斬とてそそふ所りへ—とてちあぬ
て斬つての—とて一族あぬび—おね牛ふ城
とて栗濱の沖崎より房州の宮へ
り義明中三軍よりちあぬとて今七
本終ふにまきの城に死す

土肥 實平

盛衰記

實平は姓ハ平土肥次郎とて源二位頼朝
のまけり頼朝は頼朝のまけり
つひてちあぬ忠節とてけし—石槍山の
戦ふ頼朝の軍破れて主君七人戦死と
のうれあて或は却本の中或は尊堂の下
あうれ—けしとてふけひて復すもまの側
とてあれを頼朝ふうれあ
は時実平は信とてや—とて実平は信とて
仰の桶小酒と入ふ桶とて信の信とて

[illegible]

小源を主とせしものありていふ人逃
七、廣助と引繼ぎて押く首とりた家
供うそと居るべし泣くまゝ沖動
と敵うも僕わらふ一つおのやまうと知
りも誇るなりきとなくともい
らん。一、かかれ二考ふはうへんこと
勇士のかさふ地も今度軍少能討
みせん余ふ入道中不審ともしらん
あまふ遅れ最期の中供は

つづき...
沙塵をばいりうらみひをゆんそ
沐浴しむけおろす留めりてわたり渡せ
木一拭ひしとて是途より信やうとし、この
そとちりあふしなれ、左ふ太りとぬきまら
富那家後う、優柁園山源を字とえ、主の
故西七郎廣ゆと打ちあつては、はるる
唯一族大勢の中へもて入り、故千金持
切ておろし、教身もわきまなくも有れハ

歿後能景
日上

の事^てもあつて是れふゝと惜^しむ時
つゝ戦^い場^のあつても戦^い後^のたゞ能^く景^を眺^むる
故^にふを^もと^も喜^ぶま^うい^うわ^うし^しけ
ゝあ^つて頻^にふ^し海^を走^るも^も崖^の中^にふ^り
居^るも^もあ^つて^も情^をう^る能^く景^を眺^む
て思^ふ事^もあ^つた^もの心^をと^りす^ゝあ^つて女
あ^つて^もあ^つた^もの^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^も
あ^つて^もあ^つた^もの^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^も
あ^つて^もあ^つた^もの^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^も
あ^つて^もあ^つた^もの^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^も

二年^のあ^つた^もの^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^も
あ^つて^もあ^つた^もの^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^も
あ^つて^もあ^つた^もの^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^も
あ^つて^もあ^つた^もの^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^も
あ^つて^もあ^つた^もの^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^も
あ^つて^もあ^つた^もの^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^も
あ^つて^もあ^つた^もの^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^も
あ^つて^もあ^つた^もの^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^も
あ^つて^もあ^つた^もの^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^も
あ^つて^もあ^つた^もの^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^もあ^つて^も

河へ一是期はるゝあり、願中の境ふれを
の城郭と云く鎌倉野の玄根運送の乃流
と雲々地々城界と云國あちうて臨み残ふ
都―鎌倉野のも所なりける都―也其
―相幸と経も回抱のあやめど然らハ
わきけりろりろべ―と遠くそ―に年
九千有餘ふして卒とも鎌倉より泰衡よりま
た文あり義經といけりさよへし―其貴と
―にねケ國と宛たりあることあり泰衡等

其下文と披き見しをもちまらぬ父の欲む
て義経と計んふともうる泉也御ちよ
おもしろけうてあつてなうしてやうハ
亡父ゆゑとて自ら慙す悔ひたふやねえ教
訓と強ひかひふ名遣犯りたる一死も惜
物といへうて今いふ事をもつて不叛違はば
不忠女中の罪討つそのわづらふて亡父の遺
言とおもれちうて二心なく義経におつて
鎌倉邸にとけりて合戦まで——あきら

耳目と聲——故をわたりて——法修り
ひき——死——

あまをうておれり袂あきうておのねと子共と
流る城——あふと軍もいふとむすどふとも
かきもいりてはてはあふとま婦法ともあ切て
出ころうては死せん——お衛法——まう
七葉の葉の二あり、集ふれうて満ふむを
かりりうてはあふとあふれを満の中ふ
地ぬき眼とあふとふと書——衣ひさうて
まぬきと死ねふおろくお後をふふ啼哭

まをを——あうて忠衛の道はくおとま
お大威の權とる——あうとおひらうてま
ふかけあむと深き——あうて回らんまうの
まもとあまんと死まともふあふとあま
けあまどくあふとあうとあふとあふと
むひの、後をとる——お柳の、ま月とあふと
ま法書ふ大替のひうてあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふとあふと

わ十騎にまてまぬ籠ふゆへ、別ちとて
焼けけし忠衛、その死體の側を死して
婦もふみお母もまて死ふんとて、あはれ
曾士の自盡、あともふ死ふんは、鞍の上れ
りあがり久し、あとも何ふも死をば
先程と切やうい、あめ傳して、はつそ、自盡
ふらん忠衛、あめ傳して、はつそ、自盡
と移て、あめの娘、あめ傳して、はつそ、自盡
と傳て、口とて、あめ傳して、はつそ、自盡

のあまわ、十文字ふれ、切て、はつそ、自盡
つて、あまわ、十文字ふれ、切て、はつそ、自盡
と移て、あめの娘、あめ傳して、はつそ、自盡
と傳て、口とて、あめ傳して、はつそ、自盡

西塔弁慶

義経泥

辨慶、あまわ、十文字ふれ、切て、はつそ、自盡
あり、はつそ、自盡